

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> <li>算数科や国語科を中心に、豊かな言語活動を通して、思考力、判断力、表現力を育てる授業展開を図る。</li> <li>学習のスタンダードに基づく全校で統一した指導を継続的にを行い、ノートに考えを書いたり、まとめたりするなどのノート指導等を大切にす。</li> <li>中学年での算数の少人数指導において、単元の特性に合わせて習熟度別の指導を取り入れたり、個に応じた支援を充実させたりして、基礎・基本の定着を図る。</li> <li>手順を明確にしたり、個に応じた支援(配慮を要する児童も含む)を充実したりして、わかる授業づくりをする。</li> <li>朝読書や保護者の方々による読み聞かせを継続し、本を読む習慣を身に付けるとともに、豊かな心を育てる。</li> <li>総合的な学習や特別活動等の系統性を意識した指導と改善に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたち同士の学び合ができるような学習をデザインしてきたことにより、自他の意見交換ができ、思考力・判断力・表現力が育ってきている。</li> <li>3年生から5年生までの算数の学習を習熟度別に実施したことにより、つまづきを支援することができ、基礎・基本の定着を図ることができた。</li> <li>少しの時間でも読書をしたり、調べ活動に図書を活用するなど、本に親しむ機会が増えたことにより、豊かな心の育成が図られただけでなく、学習を深めることができた。</li> </ul>	B
豊かな心	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習や生活、係活動等において、子どもが主体的に活動できる場面を意識して設定する。</li> <li>異学年との関わり方や役割を学ぶよう、フレンドチームや幼保小交流等のめあてを意識させる。</li> <li>牛久保の「まち」に目を向け、心や感性を育てるように、地域教材や体験的な活動を系統的に取り入れる。</li> <li>自らを振り返り、よりよく生きようとする心を育む、よりよい道徳の時間の指導を研究し、指導に生かす。</li> <li>学年一斉下校や毎月の登下校指導を継続し、校外委員や地域の見守りの方との共通理解をもとに安全指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全職員で、子どもたちの主体性を育むために、活動を見直し、声掛けを続けてきた結果、活動を創り出す喜びを感じた子どもたちもいた。</li> <li>フレンドチームの活動においても教師が意図的に声を掛けてきたことによって、日常の場面においても挨拶を交わしたり、一緒に遊んだりする姿が見られるようになった。</li> <li>重点研の道徳で、多面的・多角的な見方や考え方、そして自己の見つめ方等を研究したことで、普段から意識している教師が増えた。</li> <li>「まち」に眠っている材をもっと活用していけるような取り組みを考えていく必要がある。</li> </ul>	B
健やかな体	<ul style="list-style-type: none"> <li>食や体に対する関心を高めるために、栄養教諭による食育の学習を継続して行ったり、学校保健委員会で子どもたちに今必要なテーマを取りあげたりする。</li> <li>体力向上が継続するよう、一校一実践の「縄跳び」に、体育の時間や集会の時間などに引き続き取り組む。</li> <li>外遊びを奨励するとともに、体育の授業力を高めるため、体育実技の指導方法の研修等に教職員が取り組み、日常の指導に生かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>給食訪問計画に基づいて、栄養教諭が各クラスで会食をしたり、系統性を考えながら指導したりすることができた。また生活科や家庭科、保健等の時間に、学級担任と連携して授業を行い、食に対する関心を高めることができ、主食、主菜、副菜等全ての調査項目において、残食量が低下した。</li> <li>体力テストでは、昨年度と同様に、立ち幅跳びの記録がよく、持久力をみるシャトルランの記録が低かった。持久力を高めるために継続可能な取組を考え、実施していく必要がある。</li> </ul>	B
人権教育 児童・生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>Y-Pアセスメントによる学級分析を年2回行い、児童理解をさらに深め、個に合った効果的な支援をする。</li> <li>児童指導の基本となる人権研修に引き続き取り組み、児童への人権週間の取組をより系統的にする。</li> <li>いじめや不登校などの諸問題に対し、担当が主体的にかかわりながら、学年主任や児童支援専任が積極的にかかわり、情報を共有したり、指導方法を工夫したり、保護者と連携したりできるように組織的に対応する。</li> <li>挨拶週間を継続し人との関わりを大切にするするとともに、児童引き継ぎや職員会議の情報交換等による共通理解のもと、全職員が児童指導に当たるように努める。</li> <li>月別生活目標をもとに、子どもたちに必要な生活態度について、全職員が共通した指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の見取りとY-Pアセスメントの分析を合わせながら、児童理解を深め、個に合った効果的な支援の仕方を模索してきた。</li> <li>組織を活かしながら、不登校等の諸問題に対し、ケース会議を開きながら対策を考え学校全体で子どもたちを支援していく体制をとった。</li> <li>「いじめ対策防止委員会」や毎月の職員会議等で、子どもの情報交換を行い、全職員で情報を共有し合うことで、連携しながら支援を続けてきた。「よこはま子ども会議」を経て子どもが中心となって行う取り組みと教師側の取組とが結びつき、効果を発揮できるようにしていく必要がある。</li> </ul>	B
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>特別な支援が必要な児童に一人ひとりに応じた授業や適切な支援・手立てを考え、個別の教育支援計画や個別の指導計画を立て、情報交換や共通理解のもと、児童や保護者の思いに寄り添った指導を心掛ける。</li> <li>コンサルテーションや校内研修の充実を図り、特別な支援を必要とする児童に対して全職員が共通理解をし、全教職員が適切な関わり方ができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、保護者の思いやこれまでの支援等も鑑みながら、個に応じた指導を心掛けてきた。</li> <li>サポート事業の特別支援の研修に全職員で参加し、意識を高めることができた。</li> <li>他機関との連携を図りながら、困り感を抱いている子どもの支援を全職員の共通認識の下、進めることができた。</li> </ul>	B

地域連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習や生活科、社会科等では、地域の「材」を活用した体験的な活動を重視し、地域の教育力(人・もの)を活かした単元開発に積極的に取り組む。</li> <li>児童と共に教職員も、地域行事や小中一貫ブロックの活動に積極的に参加し、地域とのかかわりを大切に子どもを育てる。</li> <li>幼保小・中の連携事業にも積極的に取り組み、子どもの発達や学びの連続性を保障するとともに、思いやりと優しさを育み、「自分が好き」「まちが好き」な子を育てる。</li> <li>幼稚園での職員研修を継続する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学援隊の方々の紹介を常掲することで、子どもたちが名前を覚えたり、あいさつが活発にできるようになったりした。</li> <li>地域の「材」を活用した活動を、社会科や生活科、総合的な学習の時間に展開していけるようにしていくことが課題である。「まちが好き」と答えられる子どもを増やしていくためにも、地域コーディネータを活用して人とのかかわりを大切にしていく必要がある。</li> <li>幼保小中の一連のつながりが意識できるような取り組みを工夫していくことが必要である。</li> </ul>	B
人材育成・組織運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>若手教員が増えている現状から、4年次前の教諭を対象としたメンターチームの校内研修に力を入れ、授業研究以外の研修内容も取り入れる。</li> <li>ミドルリーダーの育成に力を入れ、校外研修に派遣したり、校務分掌の配置を工夫したり、研修会や実技研で積極的な働きができる場の設定する。</li> <li>経験豊かなベテラン教諭が、自分のよい経験を若い世代に引き継いでいけるよう、学年研や研修会等でしっかりと指導をする体制を整える。</li> <li>三部会がより有効に機能するように、教務会の機能を高めたり、主任や担当代表の力量アップに努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4年目の教員が中心となってメンターチーム研修を計画的に行い、授業研究や日頃の困っていることなどを話し合う機会を設けていった。</li> <li>学年研や重点研等の設定された時間だけではなく、普段の会話でも、子どもたちの話題を出し合い、よい点や課題点等を話す時間を大切にしてきた。</li> </ul>	A
いじめへの対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめはどの子にも起こり得るという事実を踏まえ、いじめ未然防止に向けて児童がいじめの問題を自分たちの問題として考え、主体的に話し合う機会や活動を行う。</li> <li>全ての教科等で人権尊重の精神を基盤とした教育の推進を図る。今年度重点研究として取り上げている特別な教科「道徳」との連携を図り、実践的な取組を図る。</li> <li>「いじめ防止メソッド」の活用や「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の計画的な取組を行い、互いに認め合える人間関係や学校風土をつくる。</li> <li>定期的なアンケート調査や教育相談を行い、児童がいじめを訴えやすい環境・体制を整え、いじめの実態把握に努める。</li> <li>スマホ・携帯教室などを児童だけでなく保護者にも呼び掛けたり、他機関と連携して行ったりして、情報モラル教育を充実させる。</li> <li>教師のいじめ防止への認識を深めるために、計画的に研修を行い、スキルアップを図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>月に一度の学校生活アンケートの記入やそれを受けての教育相談、そしていじめ防止対策委員会など、子どもたちが心に抱えているもやもやした気持ちを聞き取り、支援する体制が整えられた。また、担任自らが子どもの様子の変化を察知し、早めにその対策をとることができたケースもあった。</li> <li>スマホに関するトラブルは6年生でも何件か発生したが、子どもだけではなく、保護者の認識の甘さもある。そのため、来年度は情報モラルの学習を5年生だけではなく、今年度受講した6年生も再び受講したり、保護者の参観日に合わせて行うなどの工夫をし、親子で考えていける時間を設定する必要がある。</li> </ul>	B
ブロック内相互評価後の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>日頃子どもたちに接している教員の見取りを大切にしながらも、全国および横浜市の学力・学習状況調査を分析することは、客観的に傾向等を把握するためにもとても大切なことであると認識をえることができた。</li> <li>今年度担当者会で話し合った「育てたい資質・能力」を念頭に置きながら、新しい学習指導要領の3つの柱を意識して本校として育てたい資質・能力を考えていく必要がある。</li> <li>今年度編成した組織を活用して、担当者だけではなく、4校の全職員の意識をたかめていくための具体的な取組の工夫が必要である。また学区全体が調整区域になっている本校としての小中の連携の在り方を考えていく必要もある。</li> </ul>		
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもは、熱意のある先生が好き。一生懸命やっていることは、子どもたちに伝わっている。</li> <li>就学前の子どもたちから小学校につながっていることが大切だと思う。</li> <li>登下校だけでなく、近所ですれ違うときも子どもたちから「おはよう」「こんにちは」とあいさつされる。学援隊をやっているよかったです。顔を覚えていてくれて嬉しく思う。</li> <li>盆踊りなど地域行事にはもう少し参加してもらえると嬉しい。保護者ただ参加するだけではなく、準備から参加してもらえると地域行事のよさが分かんと思う。</li> <li>子どもを真ん中にして、保護者など大人たちも互いに声を掛け合って、つながっていく意識をもっともてるようになるとうい。</li> </ul>		
学校経営中期取組目標振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>前年度の学校評価の結果をふまえ、子どもたちの自主性を育てることを全職員が意識して様々な教育活動を進めてきた。その結果、全校をリードしてきた6年生は、自分たちでアイデアを出し合い、計画・実行に向けて自主的に活動を進められるようになってきた。この傾向が更に来年も継続されるように、職員で支援の仕方を考えていきたい。</li> <li>日々の教育活動において課題と感じていることは、学年研、三部会、教務会等で出し合い、改善案を検討し、実践に移してきた。PDCAサイクルのチェック(C)とアクション(A)を速やかに行うことにより、よりよい教育活動が展開できるように努めた。</li> <li>児童支援専任を中心としながら、全職員で子どもたちを支援していく体制がしっかりと整い、機能していた。また、他機関との連携を図り、チーム学校としての体制づくりに努めた。</li> </ul>		